

大学生の高齢者観

入江和夫・山本圭郎*

University Student's View concerning Senior Citizen

IRIE Kazuo & YAMAMOTO Yoshiro

(Received September 29, 2006)

1. はじめに

日本は2015年までに65歳以上の高齢者が26%に達成する見込み¹⁾であり、急激な高齢社会に突入しようとしている。日本の高齢者はかつて大家族の中で孫などの養育に関わり、家庭の中に居場所があった。しかし、産業構造の近代化によって、夫は外に働きに出かけ、妻が家庭を守り、育児を家事の一部として担当するようになった。さらに少子化によって高齢者が育児に関わる機会を奪われ、世話を受けるだけの存在になってしまった²⁾と言われている。

エイジズムを研究しているアードマン・B・パルモア³⁾は高齢者に対する否定的偏見を反映する“病氣”、“精神的衰退”、“孤独”、“貧困”などのステレオタイプに関して考察し、事実と違ふと述べている。正高⁴⁾は「古い」の意識の大部分は周囲の「老人」というレッテルを受け入れることで獲得されると述べている。また、高齢者の“年をとって醜い姿をさらしたくない”などのうつ病の心的理由はそのレッテルによって感化され、しかも当のレッテルは高齢者への不当な誤解にもとづいて形成されていると述べている。

高齢社会に突入するにあたり、若い世代が高齢者について抱いている先入観や思い込みを正し、正確な知識を身につけることは重要である。学校教育の中で、高齢者を扱う家庭科は今回改定された高等学校「家庭」の学習指導要領（平成15年実施）によって「高齢者の心身の特徴と生活」などを理解させることになっている。平成18年に山口大学に入学した学生はこのことを学習してきたはずであるが、果たしてどのような高齢者観をもっているのだろうか。

そこで、このことを把握するために、高齢者の「人間関係」、「健康」、「心配事や悩み事」に関する調査⁵⁾⁶⁾と同じものを大学生に実施し、高齢者の結果と比較して大学生の高齢者観を明らかにするとともに、今後の家庭科教育のあり方を一考した。

2. 資料と分析方法

- (1) 調査資料：平成17年度版 高齢社会白書⁵⁾および内閣府「H14 高齢者の健康に関する意識調査結果」⁶⁾
- (2) 分析方法：高齢者と学生の度数による違い（ 2×2 の χ^2 検定）

キーワード：高齢者観、エイジズム、家庭科教育

* 山口大学大学院教育学研究科

3. 結果と考察

(1) 人間関係

1) 家族

i) 家族形態

高齢者の家族形態を調べた選択肢は“①子どもとの同居”、“②夫婦のみ”、“③一人暮らし”、“④その他の親族と同居”、“⑤親族以外と同居”である。大学生に同じ質問をし、大学生から見た高齢者の家族形態を探ることにした。①+②+④+⑤を「家族や他の誰かと一緒に住む(p)」、③を「一人で住む(n)」として χ^2 検定を行い、その結果を図1に示した。(なお、%の値は小数点第2位を四捨五入したことから合計が100%にならない場合もある：以下も同様)

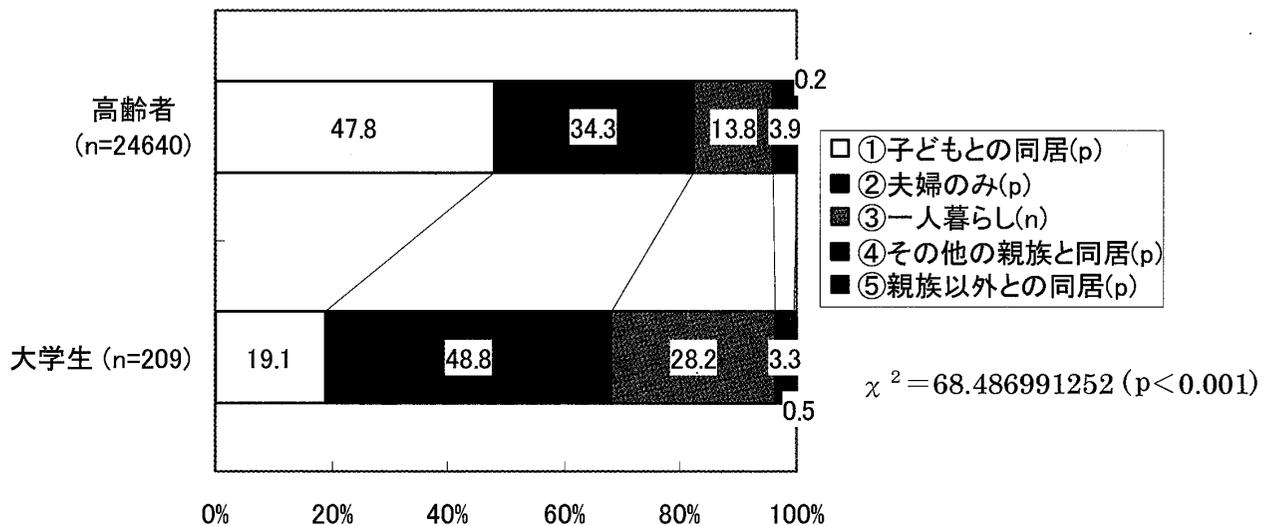


図1 高齢者の家族形態

高齢者による「家族や他の誰かと一緒に住む(p)」の内訳は「①子どもとの同居」47.8%、「②夫婦のみ」34.3%など、合計86.2%であるのに対し、「③一人暮らし」は13.8%であった。これに対して大学生は「②夫婦のみ」48.8%、「①子どもとの同居」19.1%など、合計71.8%で、「③一人暮らし」は28.2%であり、後者は高齢者自身の回答に比較して約2倍であり、「一人暮らし」している高齢者について大学生は実際よりも、その割合を多く考えていた(有意差あり)。言い換えれば、大学生は高齢者に比べ一人暮らしをしていると多く考えていた。

ii) 子どもとの接触頻度

高齢者の「子どもとの接触頻度」を調べた選択肢は“①ほとんど毎日”、“②週1回”、“③月1回”、“④年に数回”、“⑤ほとんどない”である。大学生に同じ質問をし、大学生から見た高齢者の「子どもとの接触頻度」を探ることにした。①+②+③を「濃密な接触(p)」、④+⑤を「希薄な接触(n)」として χ^2 検定を行い、その結果を図2に示した。

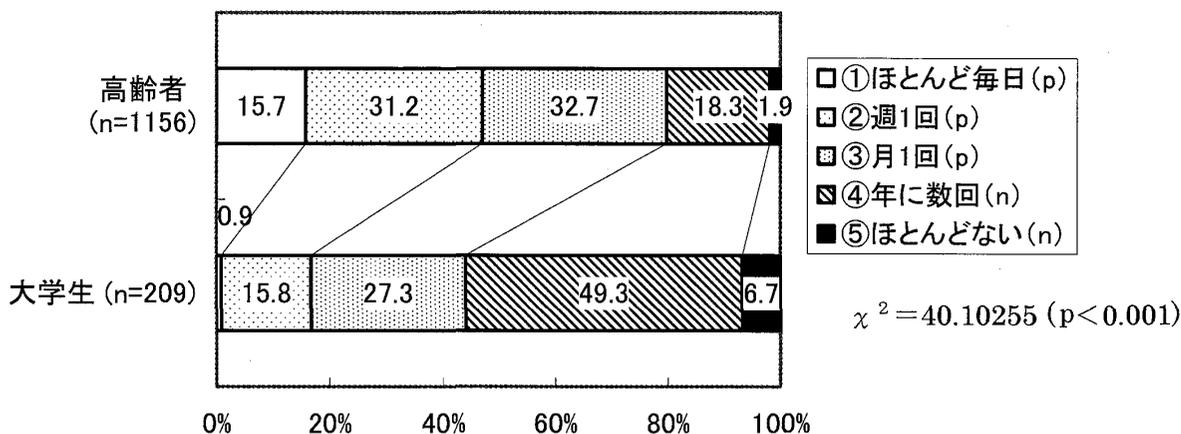


図2 高齢者と別居している子どもとの接触頻度

高齢者による子どもとの「濃密な接触 (p)」では「③月1回」32.7%、「②週1回」31.2%など、合計79.6%であるのに対し、「希薄な接触 (n)」では、合計20.2%であった。これに対して大学生は前者が44.0%、後者が66.0%であり、子どもと「希薄な接触」をしている高齢者について大学生は実際よりも、その割合を多く考えていた (有意差あり)。言い換えれば、大学生の多くは高齢者が子どもと希薄な接触をしていると考えていた。

iii) 子どもや孫とのつきあい方

高齢者の「子どもや孫との付き合い方」を調べた選択肢は「①全く会わずに生活するのがよい」、「②たまに会って会話する程度」、「③いつも一緒に生活できるのがよい」、「④時々会って食事や会話をするのがよい」である。大学生に同じ質問をし、大学生から見た高齢者の「子どもや孫との付き合い方」を探ることにした。③を「一緒に生活したい (p)」、①+②+④を「距離を置いて生活したい (n)」として χ^2 検定を行い、その結果を図3に示した。

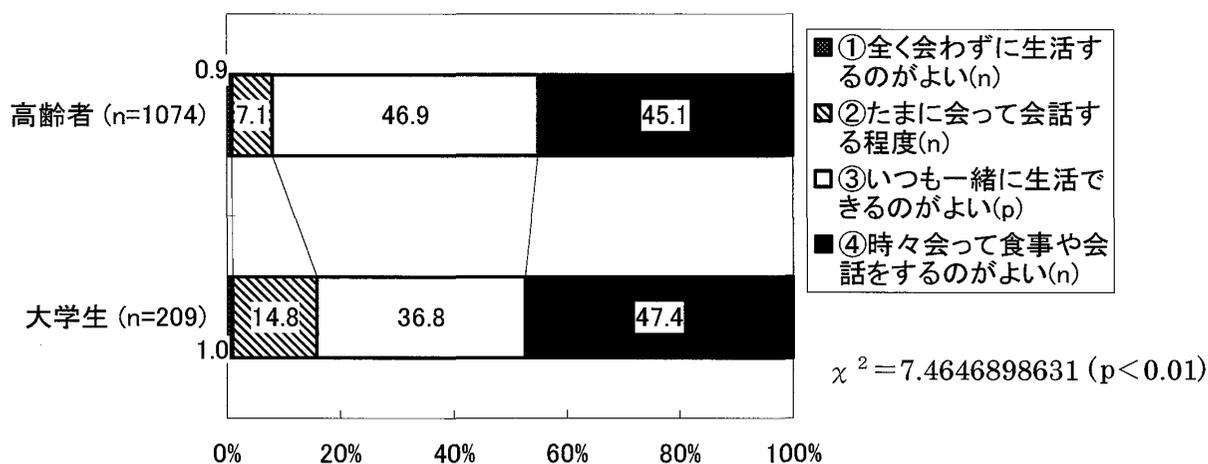


図3 高齢者と子どもや孫との付き合い方

高齢者による「一緒に生活したい (p)」は46.9%であるのに対し、「距離を置いて生活したい (n)」では「④時々会って食事や会話をするのがよい」45.1%、「②たまに会って会話する程度」7.1%など、合計53.1%であった。これに対して大学生は前者が36.8%、後者が62.2%であり、子どもと「距離を置いて生活したい」高齢者について大学生は実際よりも、その割合を多く考えていた (有意差あり)。言い換えれば、大学生の多くは高齢者が子どもと距離を置いて生活したいと考えていた。

2) 地域

i) 近所の人との交流

高齢者の「近所の人との交流」を調べた選択肢は“①親しく付き合っている”、“②挨拶をする程度”、“③付き合いはほとんどない”である。大学生に同じ質問をし、大学生から見た高齢者の「近所の人との交流」を探ることにした。①を「付き合いが濃い(p)」、②+③を「付き合いが希薄な(n)」として χ^2 検定を行い、その結果を図4に示した。

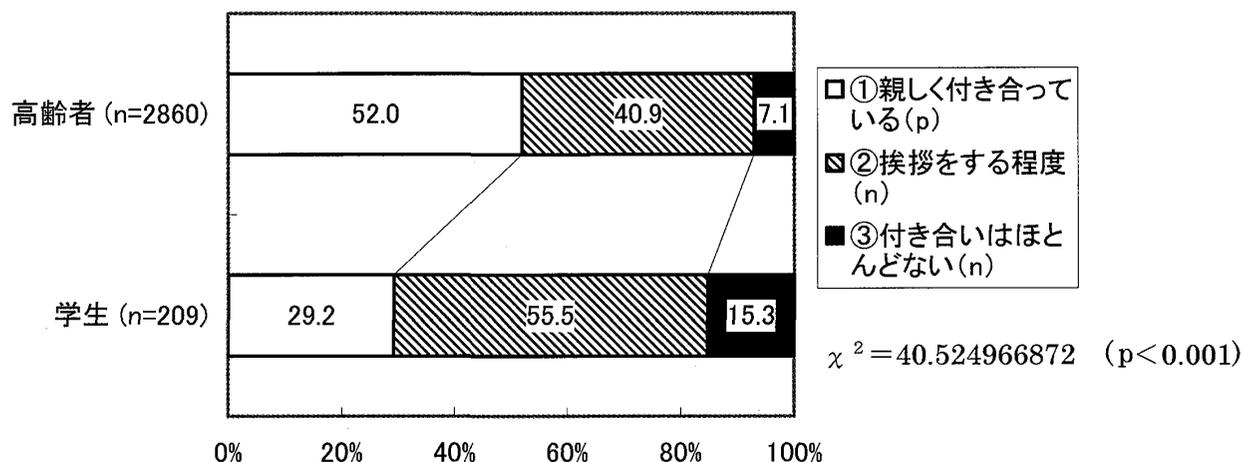


図4 高齢者と近所の人たちとの交流

高齢者による「付き合いが濃い(p)」は52.0%であるのに対し、「付き合いが希薄な(n)」では「②挨拶をする程度」40.9%、「③付き合いはほとんどない」7.1%で合計48.0%であった。これに対して大学生は前者が29.2%、後者が70.8%であり、近所の人たちとの「付き合いが希薄な」高齢者について大学生は実際よりも、その割合を多く考えていた(有意差あり)。言い換えれば、大学生の多くは高齢者が近所の人たちとの希薄な付き合いをしていると考えていた。

ii) 親しい友人

高齢者の「親しい友人」を調べた選択肢は“①いる”、“②いない”である。大学生に同じ質問をし、大学生から見た高齢者の「親しい友人」を探ることにした。①を「友人有り(p)」、②を「友人無し(n)」として χ^2 検定を行い、その結果を図5に示した。

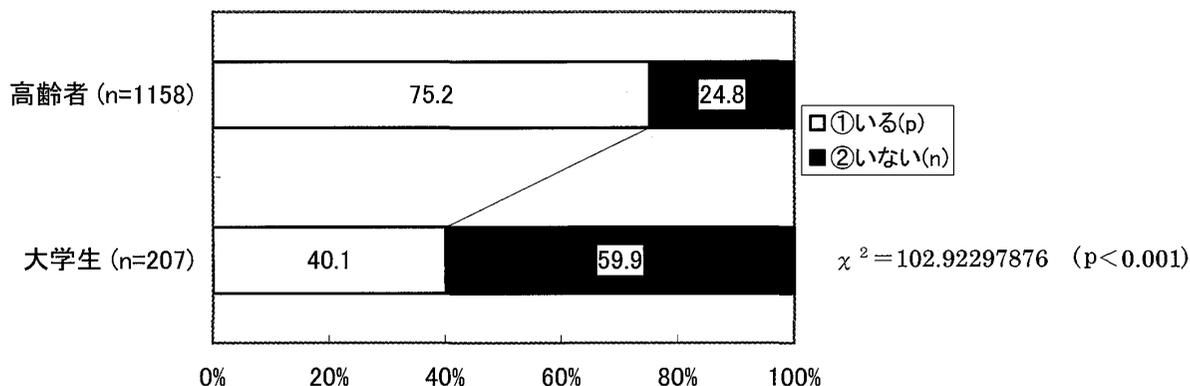


図5 高齢者の下しい友人の有無

高齢者による「友人有り(p)」は75.2%であるのに対し、「友人無し(n)」は24.8%であった。これに対して大学生は前者が40.1%、後者が59.9%であり、「親しい友人無し」の高齢者について大学生は実際よりも、その割合を多く考えていた(有意差あり)。言い換えれば、大学

生の多くは高齢者には親しい友人がいないと考えていた。

(2) 健康

1) 健康状態

高齢者の「健康状態」を調べた選択肢は「①良い」、「②まあ良い」、「③普通」、「④あまり良くない」、「⑤良くない」である。大学生に同じ質問をし、大学生から見た高齢者の健康状態を探ることにした。①+②+③を「健康状態が良い (p)」、④+⑤を「健康状態が良くない (n)」として χ^2 検定を行い、その結果を図6に示した。

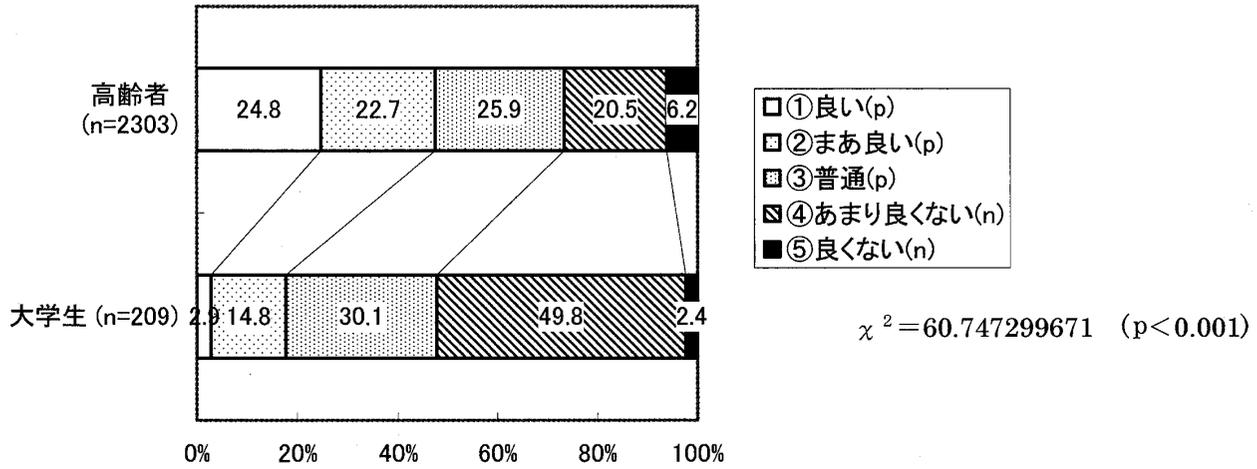


図6 高齢者の健康状態について

高齢者による「健康状態が良い (p)」では、「③普通」25.9%、「①良い」24.8%、「②まあ良い」22.7%で合計73.4%であるのに対し、「健康状態が良くない (n)」では「④あまり良くない」20.5%、「⑤良くない」6.2%で合計26.7%であった。これに対して大学生は前者が47.8%、後者が52.2%であり、健康状態について「健康状態が良くない」高齢者について大学生は実際よりも、その割合を多く考えていた (有意差あり)。言い換えれば、大学生の多くは高齢者の健康状態が良くないと考えていた。

2) 日常生活の影響

高齢者の「日常生活への影響」を調べた選択肢は「①ある」、「②ない」である。大学生に同じ質問をし、大学生から見た高齢者の「日常生活への影響」を探ることにした。①を「影響ある (n)」、②を「影響ない (p)」として χ^2 検定を行い、その結果を図7に示した。

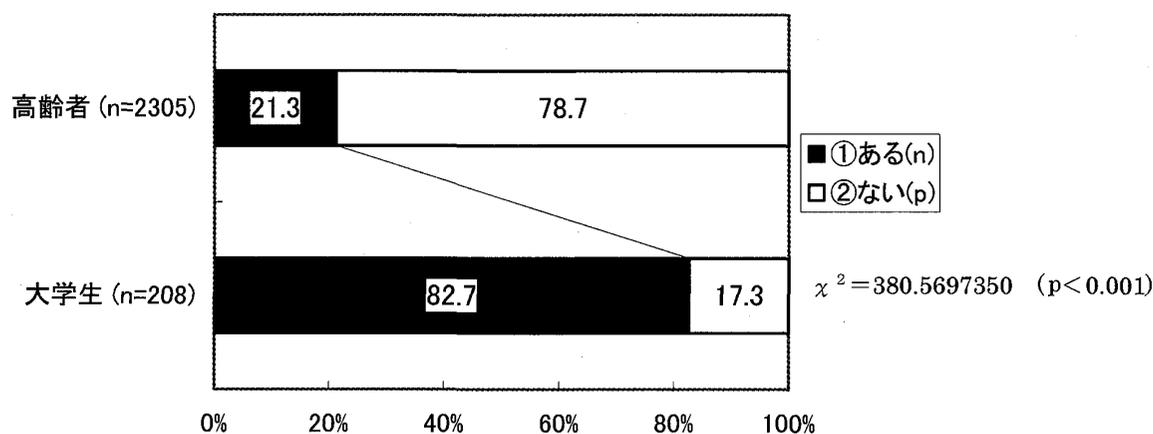


図7 高齢者の健康による日常生活への影響

高齢者による「影響ない (p)」は78.7%であるのに対し、「影響ある (n)」は21.3%であった。これに対して大学生は前者が17.3%、後者が82.7%であり、健康による日常生活への「影響ある」高齢者について大学生は実際よりも、その割合を多く考えていた (有意差あり)。言い換えれば、大学生の多くは健康による理由で高齢者が日常生活に影響があると考えていた。

3) 階段をのぼる活動

高齢者の「階段をのぼる活動」を調べた選択肢は“①とても難しい”、“②少し難しい”、“③ぜんぜん難しくない”である。大学生に同じ質問をし、大学生から見た高齢者の階段をのぼる活動を探ることにした。③を「難しくない (p)」、①+②を「難しい (n)」として χ^2 検定を行い、その結果を図8に示した。

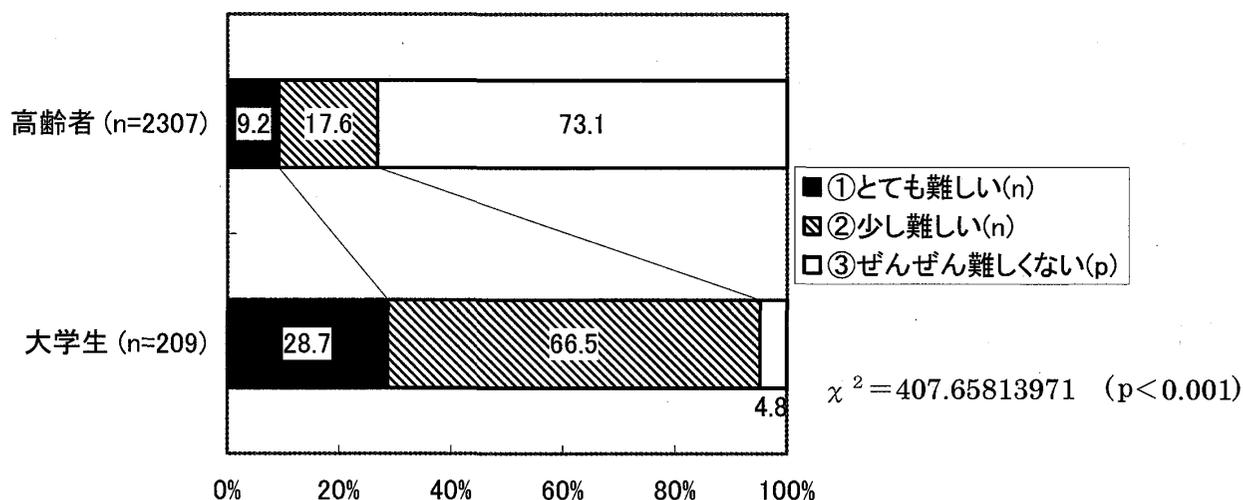


図8 高齢者の階段をのぼる活動について

高齢者による「難しくない (p)」では、73.1%、であるのに対し、「難しい (n)」では「②少し難しい」17.6%、「①とても難しい」9.2%で合計26.8%であった。これに対して大学生は前者が4.8%、後者が95.2%であり、階段をのぼる活動について「難しい」高齢者について大学生は実際よりも、その割合を多く考えていた (有意差あり)。言い換えれば、大学生の多くは高齢者が階段をのぼることが難しいと考えていた。

4) 身体的あるいは心理的理由による付き合いの妨げ

高齢者の「身体的・心理的理由による付き合いの妨げ」を調べた選択肢は“①ぜんぜん妨げられなかった”、“②わずかに妨げられた”、“③少し妨げられた”、“④かなり妨げられた”、“⑤非常に妨げられた”である。大学生に同じ質問をし、大学生から見た高齢者の身体的・心理的理由による付き合いの妨げを探ることにした。①を「妨げられなかった (p)」、②+③+④+⑤を「妨げられた (n)」として χ^2 検定を行い、その結果を図9に示した。

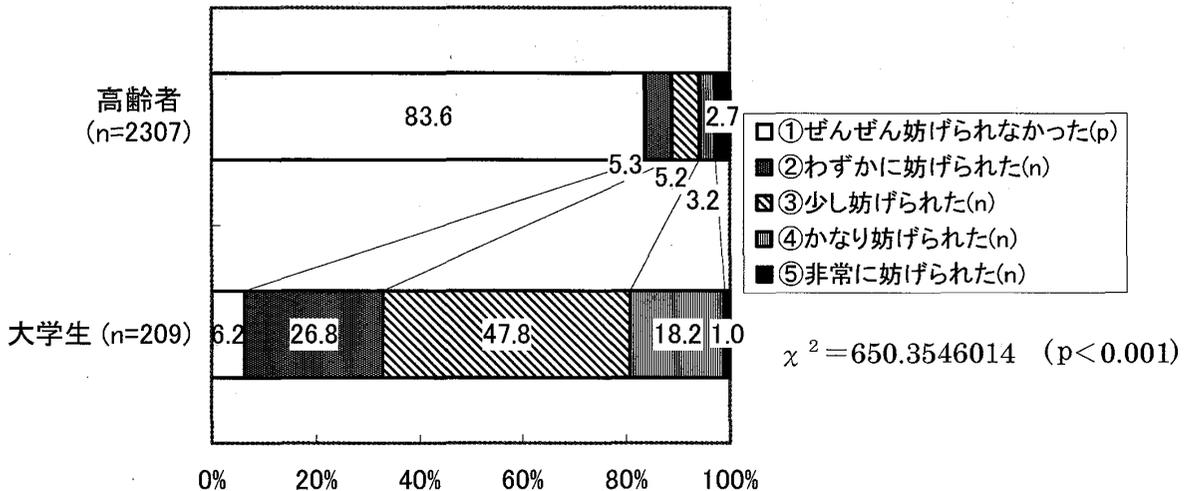


図9 身体的・心理的理由による付き合いの妨げ

高齢者による「妨げられなかった (p)」では、83.6%であるのに対し、「妨げられた (n)」では「②わずかに妨げられた」5.3%、「③少し妨げられた」5.2%など、合計16.4%であった。これに対して大学生は前者が6.2%、後者が93.8%であり、身体的・心理的理由による付き合いの妨げについて、付き合いが「妨げられた」高齢者について大学生は実際よりも、その割合を多く考えていた (有意差あり)。言い換えれば、大学生の多くは高齢者が身体的・心理的理由から付き合いが妨げられていると考えていた。

5) 気分落ち込みの頻度

高齢者の「1ヶ月の気分の落ち込みの頻度」を調べた選択肢は“①いつも”、“②ほとんどいつも”、“③ときどき”、“④まれに”、“⑤ぜんぜんない”である。大学生に同じ質問をし、大学生から見た高齢者の気分の落ち込みの頻度を探ることにした。⑤を「気分は落ち込まなかった (p)」、①+②+③+④を「気分が落ち込んだ (n)」として χ^2 検定を行い、その結果を図10に示した。

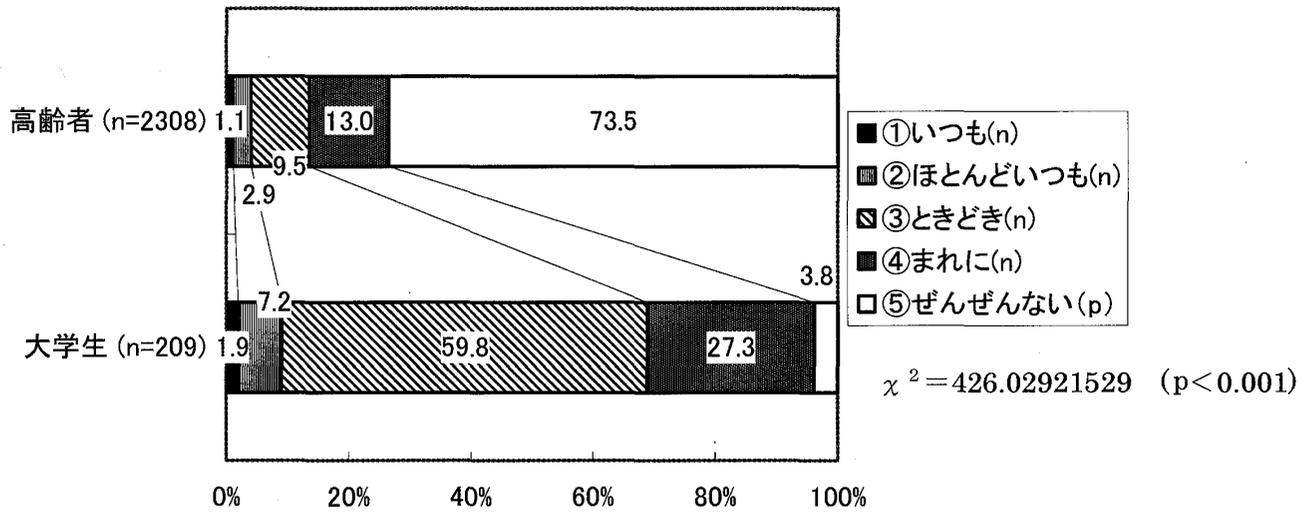


図10 気分の落ち込みの頻度

高齢者による「気分は落ち込まなかった (p)」では、73.5%であるのに対し、「気分が落ち込んだ (n)」では「④まれに」13.0%、「③ときどき」9.5%など、合計26.5%であった。これに対して大学生は前者が3.8%、後者が96.2%であり、気分の落ち込みの頻度について「気分が落ち込んだ」高齢者について大学生は実際よりも、その割合を多く考えていた (有意差あり)。言い換えれば、大学生の多くは高齢者の気分の落ち込む頻度が高いと考えていた。

(3) 心配事や悩み

1) 全般

高齢者の「心配事や悩み事」を調べた選択肢は“①自分の健康のこと”、“②配偶者の健康のこと”、“③病気などのとき、面倒をみてくれる人がいないこと”、“④一人暮らしや孤独になること”、“⑤配偶者に先立たれた後の生活のこと”、“⑥生活費など経済的なこと”、“⑦貯金や不動産など資産管理のこと”、“⑧現在住んでいる家の老朽化による修理や建替えのこと”、“⑨安心して住める家がないこと”、“⑩趣味や生き甲斐がないこと”、“⑪心配事はない”、“⑫その他”である。大学生に同じ質問をし、大学生から見た高齢者の心配事や悩み事を探ることにした。 χ^2 検定を行い、その結果を図11に示した。

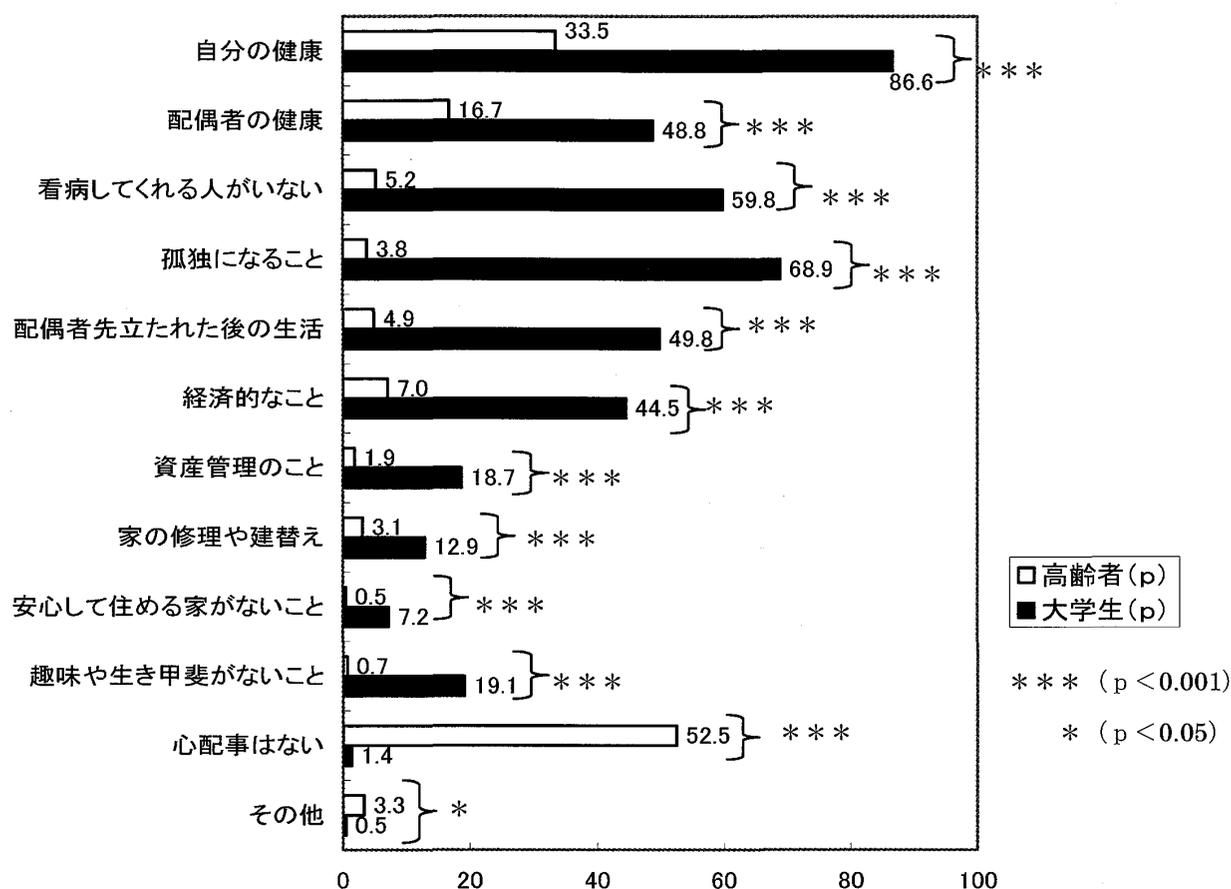


図11 現在の心配事や悩み事

全項目に有意差があった。大学生が考える高齢者の「心配事や悩み事」で多い順に注目する。大学生の86.6%（否定は13.4%）が高齢者は「自分の健康」を心配していると考えていたが、そのように考える高齢者は33.5%（否定：66.5%）にすぎなかった。次に大学生の68.9%（否定：31.1%）は高齢者が「孤独になること」を心配していると考えていたがそのように考える高齢者は3.8%（否定：96.2%）しかいなかった。次に大学生の59.8%は高齢者が「看病してくれる人がいない」ことを心配していると考えていたが、そのように考える高齢者は5.2%しかいなかった。大学生の49.8%、48.8%、44.5%は高齢者が「配偶者に先立たれた後の生活」、「配偶者の健康」、「経済的なこと」を心配していると考えていたが、そのように考える高齢者は4.9%、16.7%、7.0%しかいなかった。

一方、高齢者の過半数である52.5%は「心配事はない」と考えているのに対し、そのように考えている大学生は1.4%にすぎなかった。以上のことから大学生の多くは高齢者が種々の心配事を抱えていると考えていた。

2) 食事

高齢者の「普段の食事に関して困っていること」を調べた選択肢は“①箸や茶碗が持ちづらいなど食事の動作に関すること”、“②食べ物をかんだり飲んだりしにくいこと”、“③家族などと食べ物の好みが変わり、食べたいものが食べられないこと”、“④長時間台所に立って調理や後片付けをすること”、“⑤食事を作ってくれる人がいないこと”、“⑥近所に食材を売っている店がないなど買い物に関すること”、“⑦近所に食事ができる店や宅配してくれる店がないなど外食に関すること”、“⑧困っていることは特にない”である。大学生に同じ質問をし、大学生から見た高齢者の心配事や悩み事を探ることにした。χ²検定を行い、その結果を図12に示した。

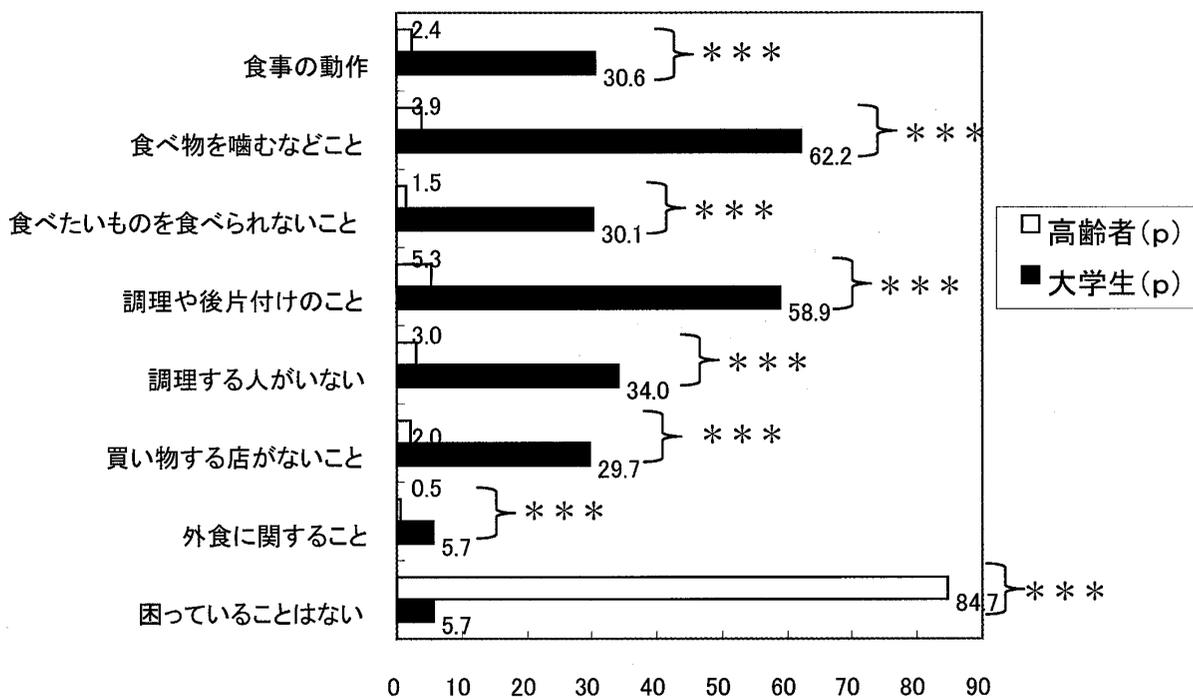


図12 食事に関して困っていること

*** (p < 0.001)

* (p < 0.05)

大学生の62.2%（否定：37.8%）が高齢者は「食べ物をかむことなど」を困っていると考えていたが、そのように考える高齢者は3.9%（否定：96.1%）しかいなかった。大学生の58.9%（否定：41.1%）は高齢者が「調理や後片付けのこと」を困っていると考えていたが、そのように考える高齢者は5.3%（否定：94.7%）しかいなかった。大学生の34.0%、30.6%、30.1%は高齢者が「調理する人がいない」、「食事の動作」、「食べたいものを食べられないこと」を困っていると考えていたが、そのように考える高齢者は3.0%、2.4%、1.5%しかいなかった。一方、高齢者の84.7%は「困っていることはない」と考えていたが、そのように考えている大学生はわずか5.7%にすぎなかった。以上のことから大学生の多くは高齢者の食事に関して多くの困ったことを抱えていると考えていた。

まとめ

大学生が高齢者による実際の回答よりも多く考えていた内容は以下のようにまとめられる。
高齢者とは

- 1) 家族では一人暮らし、子どもとの希薄な接触、子どもや孫と距離を置いた付き合いであり、地域では近所との付き合いが希薄であり、友人は無い。
- 2) 健康状態が悪く、健康による日常生活の影響があり、階段をのぼるのは難しく、身体的あるいは心理的理由によって付き合いが妨げられ、気分は落ち込んでいる。
- 3) 自分や配偶者の健康、看病してくれる人がいないこと、孤独になること、配偶者に先立たれた後の生活など心配事がある。
- 4) 箸や茶碗など食事の動作、食べ物をかむこと、食べたいものが食べられないこと、調理や後片付けなどが困っている。

大学生は高校家庭科で「高齢者の心身の特徴と生活」の内容を学習してきたはずであるのに、それを裏付ける結果は得られなかった。パルモア³⁾が「エイジズム」で指摘してから11年経過

しているにもかかわらず、大学生は高齢者に関して否定的な偏見をもっていることがわかった。それは高齢者への不当な誤解にもとづいて形成されている。大学生が持っているレッテルとは高齢者は人間関係が希薄な存在、肉体的にも精神的にも病んでいる存在、多くの心配事を抱え、食べることに困っている存在である。このような間違いを是正せず、高齢者と接すれば、どのようなようになるのであろうか。否定的高齢者観のレッテルによって、高齢者が「古い」を意識化し始め、さらにこのことは高齢者の自殺原因となるうつ病の心的理由（“年をとって醜い姿をさらしたくない”など）を感化させてしまうことが考えられる。

今回の調査結果は大学生であった。今後の研究として、授業などで高齢者と触れ合う機会が多い小学生から高校生に関する高齢者観を明らかにする必要がある。急激な高齢社会とはどこかの家庭でも高齢者の存在割合が多くなることである。家庭科の究極的な目標は明るい家庭建設であるが、その基盤に家族が正しい高齢者観をもっていることが必要である。今後、家庭科の目標に迫るためには、このような誤解を是正する学習や教材開発が重要である。

参考文献

- 1) 内閣府：「平成18年度版 高齢社会白書」
- 2) 正高信男：「ボケの前兆をつかまえた」紀伊國屋書店（2001）
- 3) アードマン・B・パルモア：「エイジズム」法政大学出版局（1995）
- 4) 正高信男：「老いはこうしてつくられる」中公新書1518（2005）
- 5) 内閣府：「平成17年度版 高齢社会白書」
- 6) 内閣府：「平成14年度 高齢者の健康に関する意識調査結果」